

「待月」にみる「ありあけの月」

はじめに

「待月」は「月を待つ」という意味の漢語表現であり、また月を眼前にしている時に、その出現を期待して愛でるという特別な観月でもある。古代の人にとって、月は暦と深く関わるものであり、また、夜の生活の光源でもあり、時間を知る手段でもあった。「月を待つ」といえば、曇りあるいは雨の夜に晴れるのを待つこともあるが、大方夕闇の後に出て来る月を待つことを意味する⁽¹⁾。

ところが、橘忠兼が編集し、平安時代末期に成立した『色葉字類抄』では、「待月」は「晨明」と共に、「ありあけ」の表記となっている⁽²⁾。平安時代の文学作品でよく見られる「ありあけ」は、一般的に「月が空にありながら、夜が明けること」⁽³⁾と解釈されており、一種の自然現象であり、またその自然現象の起こる時刻として捉えられる。人為的行為である「待月」とは、一見したところ、あまり関係していないように思われる。そのため、「待月」の表記は誤解されることもある。例えば、兪鳴蒙氏は、この「待月」は「待旦」の入れ替えではないか

と指摘している⁽⁴⁾。

しかし、八代集を見ても、「ありあけ」と「待つ」との関係が深いことがよく分かる。「ありあけ」の歌は最も多い「自然詠」を除いて、次に多いのは「待つ」歌であると細田恵子氏が指摘している⁽⁵⁾。この「ありあけ」はもちろん「ありあけの月」のことを指す。金光桂子氏はそれを受け、「有明の月は、暁の空に残って後朝の別れを彩る一方で、遅い月の出に『待つ』思いを託されることの多い景物であった」と言及している。したがって、『色葉字類抄』に見られる「待月^{ありあけ}」という言葉表記は大方「ありあけの月」の「待つ」というイメージによるものであり、その場合、「待月」は「月を待つ」より、「待つ月」と理解した方がよいだろう⁽⁷⁾。

先行研究では、「待月」と「ありあけの月」との深い関係が提示されたが、そうなる原因やその実態などはそれほど言及されてこなかった。それについては、さらに追求する余地があると思われる。本稿では、まず「ありあけの月」の定義をあらためて見直し、次に、「待つ月」としての「ありあけの月」がどのように存在し、どのように当時の貴族に

陳 馳

扱われ、そしてどのような象徴的意味を有しているのかを考察し、それを介して、「待つ月」という「ありあけの月」の一面を見極めたい。

なお、本稿では、『色葉字類抄』における「ありあけ」の表記に言及しているので、混淆を避けるために、一般的に使われている「有明」という表記を敢えて使わず、特定の場合を除き、「ありあけ」を使うこととする。

一、「ありあけの月」の定義

「ありあけの月」が「待月」と深く関わる原因を突き止めるためには、まずその定義を再確認する必要がある。「ありあけの月」の定義については、古来より諸説紛紛として、曖昧なところが多くある。例えば、『時代別国語大辞典 室町時代編』⁽⁸⁾では「有明の月」が立項され、「陰暦十六日以後の月で、夜が明けても空に残っている月」と記載される。「はじめに」で言及したように、「ありあけの月」はありあけ頃以外の時間帯でも詠まれていた。それを受けて、再び『時代別国語大辞典 室町時代編』の解釈を見ると、確かに「ありあけの月」はありあけ頃の月と述べていないが、曖昧性があり、釈然としない文章となっている。また、「十六日以後」と断言するにはなお検討する余地がある。本節では、まず「ありあけの月」は一体一月の内の何日以後の月なのか、また一晩の中のどの時刻の月なのかについて再検討する。

月は十五日前後の満月の夜に日と共に現れ、日の出と共に沈む。その後、月の出は日ごとに約五〇分ほど遅れていく。すなわち、月の

入も夜明けの時刻は日ごとに五〇分ほど遅れていくこととなり、これによって、一般的に「ありあけ」は十六日夜以後に起る現象であるとされているのである。ところが、東の空が白み始めるのは日の出の前なので、満月であつても、日の出の前の薄明の時間帯にはまだ空に残っており、辛うじて見えるはずである。加えて、月の入と日の出には毎月ずれがあり、「ありあけの月」を「十六夜以後」と定義するのは厳密さを欠くと言えよう。実際、多くの資料では、「ありあけの月」について「十六夜以後の月」と解釈していないようである。例えば、大江匡房の『続本朝往生伝』⁽⁹⁾に「十五日以後称『晨月』」とあり、十五日満月以後の月を晨月（ありあけの月）と称しているのである。その説の影響は後世の歌論書にも及び、例えば、『八雲御抄』⁽¹⁰⁾には「あり明の月は、十五日以後を云よし、有匡房往生伝」と、匡房の説を引用している。また『藻塩草』⁽¹¹⁾に「有明の月（十四日十五日以後の事也）」とあり、さらに範囲を十四日まで広げている。それは、おそらく満月の日が毎月異なるという事実を考慮した結果の解釈であり、「ありあけの月」は、既望以後の月ではなく、より広義に満月以後の月と定義すべきだと思われる。

次に、「ありあけの月」をめぐるもう一つの問題は、具体的に一晩の中のどの時刻の月を指すのかということにある。鎌田清栄氏によれば、平安時代に詠まれた「ありあけの月」が、「薄明時間帯の有明の月」という意味だけではなく、「薄明前の暗い空に輝く有明の月」や「夜更けに輝く有明の月」を指す場合もある。「薄明前の暗い空に輝く有明の月」は例えば、『源氏物語』の「須磨」⁽¹²⁾の巻に見られる。「須磨」に

「三月二十日あまりのほどになむ都離れたまひける、(中略)二三日かねて、夜に隠れて大殿に渡りたまへり、(中略)明けぬれば夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし」とあり、源氏が朧月夜の件で、都を離れようとする前に、別れを告げようと左大臣家を訪れ、その後、左大臣家を出たのは夜が明けてしまいそうな時で、その「ありあけの月」は夜明け前のまだ暗い時間にある月であった。また、「夜更けに輝く有明の月」なら、『枕草子』(二八三段¹⁵)に「十二月二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけむかし、(中略)有明の月の隈なきにいみじうをかし」とあり、御仏名の行われる夜中に、「ありあけの月」の描写が見られる。鎌田氏は、この二つの用例を含めての、様々な用例を挙げて、「ありあけの月」が夜明け以外の時間帯にも詠まれていたことを論じたのである。また、細田氏も「有明月の詠歌の時刻」には「月の出のころ」、「暁のころ」、「深更」、「終日」などがあると指摘している。¹⁶ 鎌田氏も細田氏も、その理由については追求していないが、筆者には、「ありあけの月」は時間帯に分けられるという単純な問題ではなく、そういう認識にさらに付け加えるべき要素があるのではないかと思われる。とはいえ、古辞書や歌論書などの書物を探ると、上記の問題について言及する記述はほとんどなかった。あるいは、言及する必要があるほど、人々の間で共通認識となっていたのかもしれない。

ところが、『日葡辞書』において、ほかの解釈とまったく異なるものを見ることができる。『日葡辞書』¹⁷には「一晚中沈まない月」とあり、一見したところ、意外な印象を受けるが、この記述こそが本質に迫っ

ているのではないかと筆者は考える。『日葡辞書』は江戸初期にキリシタン宣教師に向けて作られた辞書であり、そういった特別な性格がある故に、ほかの辞書よりも端的で簡潔な解釈が求められたはずである。言うまでもないが、満月以後の月は一度空に昇れば、日の出る前には沈まない月である。同時に、その月は夜が明けても、まだ空に残る月である。その二つの概念はいずれも「ありあけの月」のものであり、決して矛盾はしていない。言い換えれば、「ありあけの月」は夜明けごろまで空に残る月だけではなく、夕闇の後に昇り、夜を照らしつつ、やがて夜が明けても沈まない月のこともある。

もちろん、『日葡辞書』の時代は平安時代から数百年も離れており、その間に言葉の意味が徐々に変化していった可能性もある。その本来の姿を明らかにするために、古い時代に遡る必要がある。『万葉集』¹⁸に「ありあけの月」の歌は三首存在する。

詠月

白露を玉になしたる長月のありあけのつくよみれどあかぬかも

(『万葉集』 卷第十、秋雑歌、二二二九番)

寄月

長月のありあけのつくよありつつも君が来まさばあれ恋ひめやも

(『万葉集』 卷第十、秋相聞、二二〇〇番)

今夜のありあけつくよありつつも君をおきては待つ人もなし

(『万葉集』 卷第十一、寄物陳思、二六七一番)

三首とも「ありあけのつくよ」という表現が使われている。それを正確に理解するには、まずなぜここで「つくよ」と表現されたのかをはっきりさせる必要がある。『万葉集』では「月夜」は「月のある夜」だけでなく、しばしば「月」と解釈されている。「月」と「月夜」の区別については、すでに研究^⑨があり、中嶋節氏は『万葉集』の「月」と「月夜」の例を考察して、「人々は『月』という物体そのものを『月』として認識し、その月が清らかに照っている状態を『月夜』と表現している」と結論づけた。また、中嶋氏は「月夜」の清らかに照っている状態は万葉人にとつて月でもあり、夜でもあった、「月」または「月のある夜」と使い分けられているのは、偏重するところが異なるだけで、本当はそうに訳すべきではないと補足した。

中嶋氏の論を援用して挙げられた例を分析すると、二二二九番は目の前の「ありあけの月」を称賛する歌であり、「つくよ」は「月」に重きをおいた表現であるが、「ありあけの月」の性格は読み取りにくい。それに対して、二三〇〇番と二六七一番は、表現が異なるものの、ともに恋人を待つという趣旨を詠む歌である。一般的に「(長月の)ありあけのつくよ」は「ずっとこうしていて」と意味する「ありつつも」の序詞とされているが、「つくよ」は月が清らかに照っている状態と解釈するなら、「(長月の)ありあけのつくよ」は「ありつつも」の有心の序となり、月が清らかに照っている状態がずっと続いていると理解すべきではなからうか。そのような、「ありあけの月」がずっと清らかに照っている夜に、二三〇〇番の女性は今夜の「ありあけの月」のよみに、恋人がこれからもずっと通い続けてほしいと詠んでおり、一方、

二六七一番の女性は自分の心が今夜の「ありあけの月」のように、変わりはないと詠んでいる。つまり、二三〇〇番と二六七一番は「月」というより、「月のある夜」に重きをおいているのではないかと思われる。さらに、この二首は「ありあけの月」を使って、その状態をずっと保ちたいという願望や決意を表している。特に二三〇〇番の「長月のありあけ」という表現は「長い夜の中にずっと」という印象を強めている。したがって、「ありあけの月」に込められた意味合いは、『日葡辞書』の「一晩中沈まない月」という解釈と一致すると見なしてよからう。

以上により、今までの「ありあけの月」の解釈はやはり不十分であり、「ありあけの月」は一般に考えられているありあけ頃の月という一面的なものではなく、満月以後、夜に出て、一晩中沈まず、やがて夜が明けてもまだ空に残る月と広義に定義すべきである。ただし、『万葉集』の「一晩中の月」と比べれば、平安時代では、鎌田氏や細田氏が論じたように、或る時刻の月として詠まれる場合が多いとも言える。そして、夜遅く出る月も「ありあけの月」の非常に重要な一面である。では、実際に「待つ月」としての「ありあけの月」は平安時代の文学作品において、どのように扱われていたのか。

二、文学作品にみる「待つ月」としての「ありあけの月」

「ありあけの月」を待つといえは、『徒然草』^⑩(一三七段)の「望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、暁近くなりて待ち出で

たるが、いと心深く、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる村雲がくれのほど、またなくあはれなり」という一文で描写されたように、夜明け近くに、待ちに待ってようやく出る、情趣のある「ありあけの月」を連想しやすい。ありあけの時刻に出る、味わい深い細い月を觀賞することは、『枕草子』（二三八段）の「月是有明の、東の山ぎはほそくて出づるほど、いとあはれなり」という一文にも見られる。ところが、ちょうどありあけの時刻に出る細い月は「待つ月」としての「ありあけの月」の一角にすぎず、月末の短い時期にしか見られないものである。前節で述べたように、「ありあけの月」は、理論上、満月以後の月全体を意味する。とはいえ、文学作品ではそうとは限らない。例えば、十五夜の満月が「ありあけの月」と詠まれる例は管見に入らない。それはおそらく文学作品に現れる「ありあけの月」は客観的な定義との間に差が存在している。本節では、文学作品に詠まれる「待つ月」としての「ありあけの月」はどのような月なのかを明白にしたい。

まず、満月については、確かにありあけの時間帯に見ることができ、他ならぬ満月そのものとして詠まれるために、「ありあけの月」として詠まれることがないのである。

次に、十六日からは、月が真正正銘ありあけの時刻に空に残るようになり、また月が出る際には夕闇を待つ必要が生じ、待つ時間は日に長くなっていく。そうすると、「ありあけの月」である十六夜以後の月は自然と「待つ月」となるのである。実際、十六夜から十九夜といえ、今でも親しまれる別称、すなわちいさよひの月、立待月、居

待月、寝待月（臥待月⁽²²⁾）のことが思い起こされる。これらは、すべて「待つ月」の意味合いを有する呼称である。「いさよひ」は月が出るのをややいざよう、あるいはためらうことから転じた表現である。ほかの別称のように「待つ」という言葉は付いていないが、紛れもなく類似する意味合いを持つ言葉である。いさよひの月、立待月、居待月、寝待月（臥待月）については、文学の視点から考察した、西丸光子氏の研究がある⁽²³⁾。その研究によれば、これらの「待月」は初見が各々不同であり、初めからこのように並べられていたわけではなく、また具体的に何日の夜の月と限定されてはいなかったとのことだ。ただし、いつ頃から今のようになり、ともに並べられ、またそれぞれ何日の月と限定されるようになったのかは不明であり、西丸氏も明白には言及していない。筆者は現存の資料を探ったが、平安末期の保延元年（一一三五）に成立した『為忠家後度百首』がその初見ではないかと考えている⁽²⁴⁾。『為忠家後度百首』の「秋月廿首」の歌題の「十五夜」の次に「亭午⁽²⁵⁾月、伊佐与非月、立待月、居待月、寝待月、廿日月（後略）」とある。この配列には、数字こそ使われていないものの、最後に「廿日月」があるという点から、「十六夜月、十七夜月、十八夜月、十九夜月」が連想される。また、「伊佐与非月」に為忠の歌「みちいでしきのふのくれのけしきにもおとらずみゆるいさよひの月」があり、「昨日の満月と劣らない今日のいさよひの月」という表現から、いさよひの月＝十六夜の月という認識がすでに成立していたことは明らかである。ほかの別称はそこまで明白ではないが、限定されていく傾向が窺える。

とはいえ、『為忠家後度百首』では「ありあけの月」の歌題は「在明

月」として独立され、「いさよひの月、立待月、居待月、寝待月（臥待月）」と「ありあけの月」とがどのような関係を有するかは判断しにくい。ほかの用例でも、平安時代において、立待月詠と居待月詠は、『為忠家後度百首』にのみ見られ、「いさよひ」の用例は散見されるが、「ありあけの月」との関係を示す用例を見出すのは難しい。ところが、歌数は少ないが、「寝待月（臥待月）」にだけ、そのような用例が存在する。例えば、『古今和歌六帖』に

君をのみおきふしまちの月影はやちよもここにありあけをせよ

（『古今和歌六帖』第五帖、雑思「人をまつ」、二八二〇番）

とあり、君だけを臥しては起きて待つているうちに出てきた月よ、永遠に私とここにありあけを迎えようと女性が待ち人が来ない夜に、「ありあけの月」で心を慰めながら、詠んだ歌である。「ありあけをす」という表現はあまり見られないが、実に興味深い表現である。「ふしまちの月」が夜更けに出て、ありあけのころまで残ることを、「ありあけをする」というならば、「ふしまちの月」が「ありあけの月」そのものであるに違いない。そういう解釈も前節で定義した「ありあけの月」と一致する。また、源有房の家集『有房集』に

月のころ、山ざとなる人のもとより

ありみちがは、

こよひ君たれとながめてあかすらんわれをばすての山のはの月

かへし

いまよりはきみとねまちのよひくをまたたれとかはありあけの月

（『有房集』Ⅱ、三八三・三八四番）

という贈答歌があり、「寝待月」を「ありあけの月」と詠む例である。「今宵君は私を捨てて、誰と姨捨山の山の端に出てくる月を夜明けまで眺めるのであらう」と詠んだのに対して、「これからありあけの月を寝待する多くの宵は君以外の一体誰と過ごすことがあらうか」と返した。『有房集』の時代はまだ寝待が限定されていなかった。ただし、詞書にある「月のころ」は月が出ているころ、あるいは眺めのよいころと解釈されており、満月前後の月をも意味している。すなわち、懸け歌が詠まれたのはおそらく満月に近い十六夜以降の月夜であり、そして、返し歌の「ねまちのよひよひ」はそれ以降の毎晩のことを言っているのである。具体的に何日の月であるかを判断するのは難しいが、十八、十九日あたりと考えた方が妥当であらう。さらに、『うつほ物語』²⁶（国譲中）に

宮たち、御祓へ仕まつり果つれば、夜更けぬ、御遊びしたまふ、

（中略）かかるほどに、十九日の月、山の端よりわづかに見ゆ。尚

待のおとど、扇に書きて、一の宮に奉れば、

木綿懸けて襖をしつつもともに有明けの月のいく夜待たまし

宮、見たまひて、

長き夜の有明けの月も待つべきを禊の神やいかがとぞ思ふ

二の宮、

かくしつづ月をし待たば浅き瀬の禊の神も何か知るべき

姫宮、

月待つと桂わたりに小夜更けて弾く琴の音は神も聞くらむ

(後略)

とあり、六月十九日に女一宮一行が避暑のために桂邸に赴いた、その日の夜の場面である。宮たちは御祓が終わり、夜が更けた後、管弦の遊びをし、また山の端より昇ってきたばかりの月と御祓を素材に、歌を詠んだ。

この例は寝待などの言葉が使われていないものの、はっきりと何日の月なのか分かる例であり、また目の前の夜更けに出る「ありあけの月」に対して、「月を待つ」という表現を使っている例でもある。それはすなわち、平安の文学作品では、少なくとも十九夜以後の、夕闇の後に出てくる月が、「待つ月」としての「ありあけの月」と扱われていたのである。

以上の例からみれば、平安時代の貴族にとって、「ありあけの月」は十六夜から「待つ月」と呼べるようになるものの、文学作品においては「待つ月」としての「ありあけの月」は少なくとも寝待の夜更け以降に出る月になってはじめて、それと詠まれるようである。ただし、それが具体的に何日以降なのかは、明白に定義することが難しい。『うつ

は物語』の例は十九日の月であり、『有房集』の例や『源氏物語』須磨巻の「三月二十日あまりのほど」の「二三日かねて」はいつであるかがはつきりとわからないが、十九夜以前の月ではないとは言いい切れない。様々な例を合わせて考えると、「待つ月」としての「ありあけの月」は、文学作品において、特に十九日あたり以降の、夜遅く出る月を指していると思えた方がよからう。

では、何故「待つ月」としての「ありあけの月」はこのように扱われていたのか。その理由はおそらく、待つ必要がある「ありあけの月」にとって、立待や居待は待つ時間が比較的短く、寝て待たないと待ち焦がれる感覚が生まれにくいところにあるのではないだろうか。すなわち、平安時代の貴族たちは「待つ月」に対する、さらに言えば「待つ」という行為に対する執着や美学を持っていたと思われる。待つ時間が長ければ長いほど、出てきた時の感動が増し、待つ過程も楽しくなる。そういう趣旨を詠む歌は、例えば、『古今和歌六帖』(第一帖「歳時部」の「天」)に貫之の「ありあけ」を題とする歌

いでてこぬ山もかはらぬ長月の有明の月のかげをこそまで⁽²⁸⁾

(『古今和歌六帖』第一帖、歳時部「天」、三六六番)

がある。長月のありあけの月のまだ出ていない山はいつも月が出る山であるので、気長に待つのだと詠んでおり、長月のために、月はいつよりもより更に遅く出るので、歌は「ありあけの月」を気長に待つ必要があると強調している。また『某年冬権大納言師房歌合』⁽²⁹⁾に「ありあけ

の月」を題にする一番がある。

ありあけの月

左 ー あるじ殿

ありあけの月をまつよのうたたねは山のはのみぞゆめにみえける^③

右 ー じじゅうのめのと

まつとねずみるとてもまたまどろまずありあけの月をながめつる
まに

左の源師房の歌は、「ありあけの月」を待つ夜にうたた寝をして、月が出てくる山の端ばかりを夢に見たと詠んでおり、右の「じじゅうのめのと」の歌は、「ありあけの月」の出を待つ時は寝ず、また月が出て一睡もせずに眺めたと詠んでいる。両首の趣向は異なるが、両首ともに「ありあけの月」の出を楽しみに待つことを詠む歌であり、また同じく寝て待つべき月を寝ずに待つという気持ちを表している。ついうとうと寝てしまった夢の中にも、「ありあけの月」が出る山の端の目が眼前にあると詠んだ師房は、「待つ月」としての「ありあけの月」に対する愛着を伝えている。

奇しくも、そういった扱い方は多くの辞書や歌論書などで見られる、「ありあけの月」を特に二十日以後の月とする解釈と大方合致する。例えば、『袖中抄』^③に「下旬をばおしなべて有明、大かたは十四五日より、月の入らぬさきに夜の明くるをば、皆有明の月と云べけれど、委くはしかいへば廿日の後を云べきにや」とあり、一般的に十四・五日の望月

以後の月を「ありあけの月」というが、「委くはしかいへば」廿日以後の月が「ありあけの月」であると述べている。その「委くはしかいへば」は具体的にどのような基準に従っているのかは不明であるが、「ありあけの月」を特に二十日以後の月と限定する理由は、おそらく満月から二十日までの月は夜明けになると、すでに見えなくなるか、あるいはかなり低く沈んでいるのに対し、二十日以降の月なら、夜明けになっても、まだ比較的高くすぐには山の端に沈まず、観賞するにふさわしいからであろう。筆者は、理由はそれだけではなく、月を待つ感覚も一つの重要な基準ではないかと考えている。まさに、藤原成通が、

まつときはいつでもいずをしむ間はいらぬにいるや有明の月

（『成通集』、九七番）

と詠んだ通り、「ありあけの月」は入るところを惜しんで見るだけのものではなく、その出るところをじりじりと待つのも「ありあけの月」の醍醐味である。ほかに、類似する例は、平親宗の歌、

月をよめる

山のはをいづるもおそし入るもをしただよもすがら有曙の月

（『親宗集』、五〇番）

があり、「ありあけの月」が山の端より遅く出て、山の端に沈んでしまふという一晩の月の景色に親宗は思いを寄せている。その表現は前述

した『日葡辞書』の解釈も反映している。

ここで注意すべき点は、実際のところ、十九日ほど以後の夜遅く出る「ありあけの月」が、夜明けごろないし夜明け後の少し間に山の端に沈むことを見るのは極めて困難なことである。季節の要素を除けば、二十三日夜の半月は朝六時ほどにちょうど南中しており、昼の十二時ほどになると沈んでしまう。言い換えれば、十九日ほどの月ないし半月以前の「ありあけの月」は、かろうじて沈みつつある姿しか見られない。またそれ以後の月は、夜明けごろにまだ天中に上っていく途中にある。ところが、親宗の歌は「遅く出る」と「惜しく入る」という「ありあけの月」の二つの特徴を一晚の時間に限定している。それは成通の歌のような表現を意識して、現実状況とは食い違いがある文学的レトリックを使っているのか、それとも意図的に十九日以前の、「待つ月」としての「ありあけの月」を詠んでいるのかは判断しにくい。いずれにせよ、以上の例により、「待つ月」としての「ありあけの月」は、「ありあけ頃の月」と比べても、まったく同様の重要性が見られる。「はじめに」で言及した『色葉字類抄』に見られる「ありあけ」の漢字表記はそういった意識に基づいて、「待月」を「晨明」と並べているのかもしれない。

三、「待つ月」としての「ありあけの月」の象徴的意味

「はじめに」で言及したように、「待つ」は「ありあけの月」のイメージの一つとして、平安時代において多く詠まれており、その中でも、平

安貴族たちも夜更け以後に出る「ありあけの月」に思いを託している歌が特に突出していた。ありあけの空に残る「ありあけの月」は後朝の別れを象徴しているように、夜更け以後に出る「待つ月」としての「ありあけの月」もその象徴的意味を有している。本節では、それについて再考察したい。

「待つ月」としての「ありあけの月」に思いを託す歌の中では、「人等待つ」行爲を、「月を待つ」にかける表現が最も多く見られる。その中で最も著名な歌は、素性法師の

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな
（『古今和歌集』巻第十四、恋歌四、六九一番）

であろう。この歌に関する分析は非常に多く、ここで贅言はしない。筆者が注目するのは、このような場面で「ありあけの月」はどういった存在なのかということにある。

まず、素性法師のこの歌からは、「ありあけの月」は平安時代の女性が思い人が来るかどうかを判断する、一つの時間的指標であったことが読み取れる。問題なのは、その時間とはいつなのかということである。今までは、やはり「ありあけ」の言葉の意味の影響で、女性はあるあけの頃まで待つて、もともと後朝の別れを象徴する「ありあけの月」を見てはじめて、ようやく相手はもう訪れないことを確信したという解釈がよく見られ、つまりその時間とはありあけ頃とされるもの少なくない。しかし、ありあけの長月の長い夜に待ちに待つて、夜も

すっかり更け、「待つ月」としての「ありあけの月」も出たという時点で、相手はもう来ないだろうと悟れるはずである。素性法師のこの歌からは読み取りにくい、『新勅撰和歌集』の藤原隆信の歌

後京極摂政家歌合に、まつこひをよめる

藤原隆信朝臣

こぬ人をなにかこたむ山のはの月はまちいでてさ夜ふけにけり
（『新勅撰和歌集』巻十五、恋五、九六八番）

からはさらにはつきりと看取される。月がまだ出ていないうちは、自分はい人ではなく、月を待っているのだと格好をつけられるが、夜がすっかり更けて、「ありあけの月」が出てしまったら、そういう口実もなくなり、思ひ人がもう来ないという事実に向面しなければならなくなる。この歌には、「ありあけの月」という言葉は使われていないものの、この月は夜更け以後に出ているので、「待つ月」としての「ありあけの月」と考えてよい。

そして、「待つ月」としての「ありあけの月」は、辛く待っている人にとって、大きな慰めを感じられる対象でもある。そのような趣旨の表現は、前節で言及した『古今和歌六帖』の歌「君をのみ」からも多少窺える。ほかに、例えば『江帥集』に

おもふ人にわかれて、つかはしける

ありあけの月にこゝろはなぐさめてめぐりあふよをまつぞかなし

き

（『江帥集』I、一七〇番）

とあり、恋人と離別した後、裏切らない象徴としての「ありあけの月」に心を慰めてもらい、まためぐりあえるその夜を待ち続ける。「よ」は「世」に掛けており、相手との関係がまためぐりあうことも意味している。この歌は『続古今和歌集』に

人にわかれてつかはしける

前中納言匡房

ありあけのつきにこころはなぐさまでめぐりあふよをまつぞかな
しき

（『続古今和歌集』巻第九、離別歌、八五五番）

とやや改編されて収録されている。家集の歌とは違い、慰めの象徴の「ありあけの月」を見ても、心は慰められなかった。そのような表現は恋の歌ではよく見られるパターンであり、悲嘆を強調している。さらに、「ありあけの月」のそのような印象を逆手にとる例も存在する。『後撰和歌集』に

元良のみこのみそかにすみ侍りける、今こむとたのめてこず
なりにければ

兵衛

ひとしれずまつにねられぬ^{ありあけ}晨明の月にさへこそあざむかれけれ⁽³³⁾

〔後撰和歌集〕巻第十四、恋六、一〇三二番

とある。元良親王の「すぐ行くよ」と期待させて結局行かなかったという裏切りに対して、兵衛は「私は人に知られずにあの人を待つて寝られないうえに、待ち人だけでなく、ありあけの月にまでも騙されてしまった、ありあけの月がやっと出たが、もう夜明けになってしまった」と、待ち人の元良親王だけでなく、夜の寂しさを慰めてくれなかった「ありあけの月」に対しても、恨みと孤独感を表明している。この歌の月は『枕草子』や『徒然草』で言及されているありあけ頃になつてはじめて出る月であり、「晨明^{あけ}の月」にまでも騙されたという表現は、逆に思ひ人が来てくれない貴族の女性に期待され、慰めとされた「待つ月」としての「ありあけの月」はありあけ頃の月ではなく、夜の間に出る月であることを物語っている。

さらに、『後拾遺和歌集』に

こむといひつつこざりける人のもとにつきのあかりければ
つかはしける

小弁

なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる月かな

かへし

小式部

たのめずはまたでぬるよぞかさねましたれゆゑかみるありあけの月

〔後拾遺和歌集〕巻第十五、雑一、八六二・八六三番

とあり、恋の歌ではなく、友人同士の贈答歌という面白い例が見られる。小弁の「幸いなことに、ありあけの月はあなたと違って、本気ではないのに、私を無駄に期待させたりはしません。待てば必ず出てくるのですから」というのに対して、小式部は「私が期待させなかったら、あなたは待たずに寝たのではありませんか。誰のおかげでありあけの月を見られたとお思いですか」と返した。このような形の贈答歌はあまり見られないが、女性間のもので、恋人同士の歌と同様に、皮肉な恨みに対して理屈をつけて返している、実に面白味のある歌である。そして、最も重要な点は、この歌では、「ありあけの月」は単なる失望した人にとっての慰めのみならず、小弁の「まつにかならずいづる月」という表現から分かるように、「待つ月」としての「ありあけの月」は、約束を破る人と対照され、約束を守り、決して裏切らない存在とされていることである。

最後に、『拾遺和歌集』に

冷泉院の東宮におはしましける時、月をまつ心のうた、をのこどものよみ侍りけるに

藤原仲文

ありあけの月のひかりをまつほどにわが世のいたくふけにけるか

な

『拾遺和歌集』卷第八、雜上、四三六番

とあり、類例があまり見られない「人を待つ」以外の例である。仲文は「恩寵」を「月のひかり」に喩えて、月を待っているうちに、夜が更けてしまったように、自分は恩寵を待っているうちに、すっかり老いてしまったと詠んだ。この歌は「人を待つ」の歌と同じく「ありあけの月」を時間的指標と見なしており、老いてしまった自分に出世する機会はどう訪れないだろうと嘆いている。仲文は不遇を嘆く「述懷歌」の詠みぶりで、「待つ月」の特徴を捉えているのである。

おわりに

本稿では平安末期に成立した『色葉字類抄』に、なぜ「ありあけ」が「待つ月」と表記されているのかという問題意識を契機に、「ありあけの月」に関する先行研究を踏まえて、「待つ月」としての「ありあけの月」を検討してきた。

筆者はまず「ありあけの月」の定義を再検討し、その結果、「ありあけの月」は、理論上、満月以後、夜に出て、一晚中沈まず、いずれ夜明けころになってもまだ空に残る月であるという結論に至った。それは「ありあけの月」がありあけ頃以外の時刻にも詠まれていた所以である。

そして、そういった「ありあけの月」の中で、出るのが遅くなる十

六日以降の月は「待つ月」となるが、文学作品では一般的に十九日ほど以降の、夜遅く出る月の方が多く詠まれていた。奇しくも、それは「ありあけの月」を特に二十日以後の月とする解釈と大方合致する。「ありあけの月」がそう詠まれていた原因は、おそらくありあけ頃に月がまだはっきり見えるかどうかというだけのものではなく、月の出を待つ感覚も一つの重要な基準だと思われる。その基準によって、当時の貴族は、「ありあけの月」の様々な側面の中に、「夜遅く出る月」を「ありあけ頃の月」と同様に、「ありあけの月」の最も重要な一面と見なしていたのであった。

さらに、平安時代の貴族たちは、後朝の別れを象徴する「ありあけ頃の月」と同様に、「待つ月」としての「ありあけの月」にも思いを託して、歌を詠んでいた。その中に、主に「思ひ人を待つ」を「月を待つ」にかけるという表現が多く見られる。その際に、「待つ月」としての「ありあけの月」は、詠み人にとって、思い人はもう来ないと判断する、一つの時間的指標であり、また待ち倦む長い夜の中の、慰めの存在でもあった。当時の貴族の女性たちは待てば必ず出る「ありあけの月」と対比し、来てくれない待ち人を恨み、「待つ月」としての「ありあけの月」を裏切らない象徴と見なした。

以上の考察により、「待つ月」としての「ありあけの月」の成立する原因及び文学作品における実態が判明した。「待つ」というイメージが「ありあけの月」にとつて如何に重要な要素であるのかも明らかにされた。月末の極端な状況を除いて、夜遅く出る姿と夜が明けても空に残る姿は同列であり、ペアとなるイメージである。その二つのイメージ

によって、『色葉字類抄』で「ありあけ」に「晨明」と「待月」という二つの表記が生まれたと考えられる。そして、そういった「ありあけの月」は当時の貴族の間に共有され、独特な観月の文化を生み出したのである。

注

- (1) 三日月や夕月などの月前半の月が待月の対象となる例も存在する。拙稿「三日月と待月」「人間・環境学」第二九号（京都大学大学院人間・環境学研究科、二〇二〇年十二月）参照。
- (2) 前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成』一八・十九（八木書店、一九九九年）を参照した。前田本の二巻本と三巻本には、両方とも「晨明（ありあけ）、待月（同）」と記されている。また、三巻本の黒川本（『色葉字類抄研究並びに総合索引』（風間書房、一九七七年））でも同様の内容が見られる。
- (3) 『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂、一九八五年）では、「陰暦十六日以後、特に二十日以後、空に月が残ったままで夜が明けること。またそのころ」と解釈されている。『時代別国語辞典 上代篇編』（三省堂、一九六七年）では、ほかの記述はほぼ同様であるが、時期については、「陰暦で二〇日前後に起こる現象」と述べている。さらに、『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年）では、「月がまだ空にあるうちに夜明けになること。陰暦十六夜以後に起る現象。また、その月。また、その月の空に残っている夜明けのころ」とあり、確かに場合によっては「ありあけ」は「ありあけの月」を意味することもあるが、それは「ありあけ」本来の意味ではなかった。
- (4) 倉嶋蒙「色葉字類抄天象用語の漢字用法 ― 仮用用法を中心に―」『撰

大学術 B、人文科学・社会科学編』一一号（摂南大学撰大学術編集委員会、一九九三年二月）、二一九頁。「もとより『晨明』と同じ意味を言い表すものに、『待旦』がある。有明の月という言い方からの影響か、『旦』を『月』と入れ替えたのかもしれない」とある。確かに、「ありあけ」のもうひとつの表記「晨明」という点から考えれば、「待月」よりは「待旦」の方が意味的に近いかもしれない。しかし、「待月」と「待旦」はあまりにも意味の異なる言葉であり、加えて「待旦」は平安時代の文学においてはほとんど見られない言葉であるため、『色葉字類抄』であえてこの表記を加える可能性は極めて低いと思われる。

- (5) 細田恵子「八代集のありあけのイメージ」『文学史研究』一五卷（文学史研究会、一九七四年七月）、一六頁。

- (6) 金光桂子「『有明の別』の『有明の別』― 題号の意味するところ―」『中世の王朝物語… 享受と創造』（臨川書店、二〇一七年五月）。

- (7) ただし、この漢字表記は『色葉字類抄』以外に、同時代及び後の時代の辞書には継承されなかった。考えられる原因はいくつかあるが、おそらくもつとも肝心な理由は「ありあけ」という言葉は単独で使われる際に、確かに時に「ありあけの月」を意味する場合はあるが、やはり天象あるいは時間帯を指して言うところにあるう。言い換えれば、「ありあけ」という特殊訓は、「待月」ととってやはり不釣り合いのものであったと言える。

- (8) 前掲注三を参照。

- (9) 井上光貞・大曾根章介校注『日本思想大系』七（岩波書店、一九七四）。

- (10) 片桐洋一編『八雲御抄の研究… 枝葉部・言語部』（和泉書院、一九九二年）に収録される国会図書館本の翻刻を参考にした。

- (11) 大阪俳文学研究会編『藻塩草』本文篇（和泉書院、一九七九年）。

- (12) 鎌田清栄「平安人の見ていた有明の月を追って」『古代中世国文学』二四卷（広島平安文学研究会、二〇〇八年三月）。

- (13) 阿部秋生「ほか」校注・訳『新編日本古典文学全集』二〇（二五）（小学

館、一九九四年)。

- (14) 『日本古典文学全集』〈前掲〉の注釈によると、ここの「明けぬれば」は「夜が明けてしまいうさだから」と解釈されている。鎌田氏によれば、ここに「明けぬる」は日のことであり、つまり翌日になったと解釈している。その根拠として、鎌田氏は『古代の時刻制度』(斉藤国治、雄山閣出版、一九九五年)を参考し、「日本古代の日は暦上では夜半(午前零時)であるが、日常生活では「丑寅の境」(午前三時)である」と補足した。いずれにしても、この場面は夜明け前のまだ暗い時間であることに変わりはない。

- (15) 松尾聰、永井和子校注・訳『新編日本古典文学全集』一八(小学館、一九九七年)。

- (16) 細田恵子「八代集のありあけのイメージ」(前掲)、二四～二五頁。

- (17) 『日葡辞書・邦訳』(岩波書店、一九八〇年)。

- (18) 本稿の和歌の引用については、私家集の引用は『新編私家集大成 CD-ROM』(エムワイ企画、二〇〇八年)による。それ以外は『新編国歌大観』(ジャパンナレッジ、二〇一八年より公開)による。なお、『万葉集』の引用については、便宜のために、私に漢字を当てた箇所がある。中嶋節「『万葉集』における「月」と「月夜」について」『愛媛国文研究』三八号(愛媛国語国文学会、一九八八年十二月)。

- (19) 永積安明校注・訳、新編日本古典文学全集『方丈記 徒然草 正方眼蔵随聞記 歎異抄』四四(小学館、一九九五年)。

- (20) 前掲注一五を参照。

- (21) 『八雲御抄』に「ねまち、ふしまち、廿日月也」とある。もともと異なる意味合いの言葉であろうが、『八雲御抄』では同一視されている。

- (22) 西丸光子「平安時代の文学と月」望月、いさよひの月、立待月、居待月、寝待月」『日本女子大学国語国文学論究』第二集(日本女子大学国語国文学会、一九七一年二月)。

- (23) 『為忠家後度百首』の前に、広本『能因歌枕』(佐佐木信綱編『日本歌學

大系』〈文明社、一九四〇年〉第一巻)に「十六日いさよひ、十七日たちまち、十八日あまち、十九日ねまち」(略本には記されていない)とあり、現在と同じように、それらの別称が共に並べられ、具体的に何日の月であるかが限定されている。しかし、能因法師の時代に、「いさよひ」と「寝待ちの月」の用例は見られるが、「立待ちの月」と「居待ちの月」はほとんど見られない。西丸氏は立待月詠と居待月詠は平安時代において、『為忠家後度百首』にのみ見られると指摘したのに対して、『為忠家後度百首全釈』(風間書房、二〇一一年)では立待月詠は「本百首以前にはごく僅かしか見出だせず」と注釈をつけた。したがって、現在見られる『能因歌枕』の待ち月に関する内容は、『為忠家後度百首』の後か、あるいはもっと近い時代のものではないかと思われる。『能因歌枕』は存疑のところの多い歌論書であり、未だ定説もないようである。本稿で言及している部分のみを論じると、やはり疑いの余地があり、『能因歌枕』の文章を、いさよひの月、立待月、居待月、寝待月(臥待月)が限定される初見と見なすのはやや早計だと思われる。

(24) 夜空の真中にある月のこと。

- (25) 中野幸一校注・訳『新編日本古典文学全集』一六『うつほ物語』(小学館、一九九九年)。

- (26) 鎌田清栄「平安人の見ていた有明の月を追って」(前掲、七三頁)に「三月二十日の二、三日前というから十八日として、月は二十一時半頃に昇る」とあるが、原文は二十日あまりの二、三日前なので、この例を十八日のこととするのは適切ではないと思われる。

- (27) 『貫之集』(七四番)に、

月

いで、いるやまもかはらぬなが月のありあけのつきのかげをこそみ
れ

とあり、『古今和歌六帖』のほうは「月を待つ」趣旨に、内容を改編して収録されたと見なしてよからう。また、七三番の詞書は「延長五年九

月廿四日左大臣せんざいのまけわざうどねり橘のすけなかづつかまつりけるに、はじめのだいのすはまにかきつけたるうた七首」とあるので、七四番の歌はその一首であることが分かる。

- (29) 『平安朝歌合大成』（同朋舎出版、一九九五年）第二卷、一三三番、九二四頁。

- (30) 『金葉和歌集』にも収録、詞書は「対山待月といへることをよめる」とある。

- (31) 『歌論歌学集成』第五卷（三弥井書店、一九九九年）、『袖中抄』下。

- (32) 長谷川哲夫著『百人一首私注』（風間書房、二〇一五年、一四三頁）に『有明の月』は、男女が契りを交わした翌朝、別れの際に空にかかる月でもある。もはや別れの時刻であり、『有明の月』が出たということは、もはや訪れはないということを暗示しているのである」とある。

- (33) 『元良親王集』（一一六番）に

かねもとのむすめ、兵部のもとにいまこむとのたまて、をはせ
ざりける、又の日のつとめて、女

ひとしれずまつにねられぬありあけの月にさへこそねられざりけれ
とあり、『後撰和歌集』とはやや異なる内容のものであるが、今やどちらの歌の方が元なのかは確定できない。